

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03403

研究課題名(和文) 契約支援機能における会計の質に関する理論的・実験的研究

研究課題名(英文) An analytical and experimental research in an accounting quality

研究代表者

田口 聡志 (taguchi, satoshi)

同志社大学・商学部・教授

研究者番号：70338234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、企業会計の契約支援機能における会計の質(Accounting Quality)について、理論(分析的研究)と実験とを融合したアプローチにより検討することを目的とするものであった。具体的には、契約支援機能における保守主義や利益の質、ないし、コーポレート・ガバナンスといった諸論点を取り扱った。既存研究は、主に証券市場を前提としたアーカイバル分析が多いが、本研究は、数々の強みを持つ分析的・実験的研究と融合させ、既存研究にはない会計の質の新しい捉え方を提供することで、この領域の研究や実務に対して重要な貢献をなすに至った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine an accounting quality in the contract implementation role of financial accounting by an approach that combines theory (analytical research) and experiment. Specifically, we deal with issues such as conservatism, earnings quality, and corporate governance. Although there are many archival researches mainly based on the securities market, this research combines analytical research and experimental research, and provides a new view of an accounting quality, and we make an important contribution to the research and practice in this area.

研究分野：財務会計

キーワード：会計 保守主義 契約支援機能 ゲーム理論 経済実験

1. 研究開始当初の背景

会計不正や会計基準の国際的収斂などを背景にして、近年、会計の質に着目した研究が増えつつある。たとえば、Francis, Olsson, and Schipper (2006)など、証券市場を前提とした利益の質 (Earnings Quality) や監査の質 (Audit Quality) に関する研究については、アーカイバル・データを用いた実証分析 (以下、アーカイバル分析と略す) を中心に、その数も増加傾向にある。これらに対して、契約支援機能に着目した研究は、まだそれほど熟していないといえる。しかし、現実世界を見ると、企業間取引や企業をめぐる各種契約、ないしコーポレート・ガバナンスにおける会計情報の役立ちは極めて重要であり、更に近年は、サプライ・チェーンの構築や、M&Aにおける買収価格の算定など会計情報の利用場面が多様化していることから、このような役立ち (契約支援機能) における会計の質を掘り下げていく余地は多く残されている。

また、方法論としても、既存研究は、アーカイバル分析が中心であるが、会計の質の代理変数として何をを用いるかという点で様々な議論があるし、またデータ入手上の制約から、研究対象が限られてしまう場合もある。特に、証券市場以外の場面では、この問題は重要となる。更には、仮説設定において、理論との接続が上手く成し得ていない研究も散見され、これらの点で、検討・改善の余地がある。

これに対して、研究代表者は、分析的研究 (ゲーム理論) や実験的手法を用いた会計制度分析や人間心理分析を行ってきた (たとえば、Taguchi, Ueeda, Miwa, and Mizutani, 2013、田口 2015 など)。実験は、アーカイバル分析と比べて、(1) データのハンドリングが容易であるという強みを有し (アーカイバル・データが取りづらい対象や、現実には存在しない制度についてもデータを取ることが出来、更には人間の心理や行動に踏み込んだデータを取ることが出来る)、かつ、(2) 内的妥当性が高い (モデルの前提を直接取り込み、理論とリンクして因果関係にまで踏み込んだ検証が出来る)。また、分析的研究は、実験の前提として、制度に関する利害関係者の意思決定の原因を特定化出来るという強みを有する。よって、これらの強みを融合させた研究の重要性を感じている。また、制度分析を行う中で、制度の背後にある企業行動、特に取引や契約の場面における利益マネジメントや、それに対する監査の質を分析する必要性を痛感していた。

そのような中で、先行研究によれば (太田 2014)、シンプルなモラル・ハザード・モデルにおいて、ある条件のもとで、最適な会計システムが保守主義を内包しうる可能性を示されている。つまり、契約支援機能における会計の根底には、証券市場における会計の質とは異なるものが存在する可能性が示唆

されている。

そしてこのようなモデルを実証する際には、実験が大きな強みを発揮する。すなわち、実験は、アーカイバル分析と異なり、モデルの前提を直接取り込み、因果関係にまで踏み込んだ検証が出来るし、また、データの入手可能性という点で大きな強みを有する。特に、モラル・ハザード・モデルが前提とする場面では、アーカイバル・データの入手が困難である状況が多いが、実験によれば、そのような困難を克服することが出来る。更には、利害関係者の人間心理にまで踏み込んだ分析も可能となるため、理論モデルと異なる実験結果が生じた場合にも、その原因を掘り下げ、モデルにフィードバックすることも出来る。

そこで本研究では、主に理論と実験の融合を方法論的な柱として分析を進めていく。特にシンプルなモラル・ハザード・モデルをベースに現実の取引や契約、ガバナンスなどに拡張するとともに、かつそれらの理論モデルを実験により検証していく。つまり、契約支援機能における会計の質について、アーカイバル分析中心の既存研究とは異なる道筋 (理論と実験の融合) で検討を進めていくことが、本研究が目指すところである。

引用文献

Francis, Olsson, and Schipper (2006) Earnings Quality, *Foundations and Trends in Accounting*, Vol.1, No.4, pp.259-340.

太田康広 2014. 「モラル・ハザードと会計上の保守主義」 『会計』 第 185 巻第 3 号、pp. 374-388.

田口聡志 2015. 『実験制度会計論 未来の会計をデザインする』 中央経済社.

Taguchi, Ueeda, Miwa, and Mizutani. 2013. "Economic Consequences of Global Accounting Convergence: An Experimental Study of a coordination game." *The Japanese Accounting Review*. 3: 103-120

2. 研究の目的

本研究は、企業会計の契約支援機能における会計の質 (Accounting Quality) について、理論 (分析的研究) と実験とを融合したアプローチにより検討することを目的とするものである。具体的には、契約支援機能における保守主義や企業間取引等における利益の質、ないし、コーポレート・ガバナンスといった諸論点を取り扱う。既存研究は、主に証券市場を前提としたアーカイバル分析が多いが、本研究は、数々の強みを持つ分析的研究と実験研究とを融合させ、既存研究にはない会計の質の新しい捉え方を提供することで、この領域の研究や実務に対して重要な貢献をなすことを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、企業会計の契約支援機能における会計の質について、分析的研究と実験とを

融合して、既存研究にはない新たな捉え方を提供することである。まず初年度に基本モデルに関連したサーベイと方向性の確認をおこない、それをベースに、2年目以降でそれを派生していくかたちで進めていった。また、この領域のモデル分析について多くの業績を有するメンバー（太田・椎葉・村上）と、実験について過去に共同研究を行ってきたメンバー（田口・上枝・三輪）が融合するかたちで、役割分担をしつつ組織的に研究をおこなってきた。

4. 研究成果

本研究の目的は、企業会計の契約支援機能における会計の質について、理論（分析的研究）と実験とを融合したアプローチにより検討することを目的とするものであった。具体的には、契約支援機能における保守主義、企業間取引等における利益の質、ないしコーポレート・ガバナンスといった論点を取り扱った。3年間研究を進めていった中で主要な成果は以下の通りである。

・契約理論に基づくモデル分析と実験

発生主義による会計利益の特徴は、認識のタイミングがキャッシュフローと異なるところがあるという点であるが、我々はこのことを契約理論のモデルに折り込んで分析をおこなっている。具体的には、契約が硬直的であるとき、会計情報の適時性が重要になることを理論的・実験的に検証するとともに、完全ではない現実的な契約を補完する会計情報の役割を明らかにする。

たとえば完備契約の典型的なモデルでは、報酬契約が非常に柔軟である。このとき、複雑な契約を設計することでさまざまな問題に対処できる。このため会計の果たす役割は小さいといえる。しかし、現実の報酬契約は硬直的であり、会計指標に基づくシンプルな契約がしばしば観察されている。このように、契約が不完全な状況では、用いられている会計指標の特性がより重要になっている可能性がある。

そこで我々は、（1）会計利益の適時性（利益とキャッシュがどの程度リンクしているかという程度）と（2）経営者報酬契約の硬直性とをコントロールした2×2のセッティングで、利益の適時性と契約の硬直性が、プリンシパルとエージェントの間のエイジェンシー関係にどのような影響をもたらすかについて、モデル分析と実験研究をおこなった。

そして我々の実験からは、概ね理論予想通りの実験結果が得られているが、反面、理論予想に反した実験結果（たとえば、柔軟な契約よりも、定常的な契約の方が、契約のパフォーマンスは高いという結果）も得られている。これは、人間の有する心理バイアス（特に、複雑な問題にうまく対処し得ないという心理バイアス）とも関係した意図せざる帰結

であり、近年、ノーベル経済学賞受賞などで注目を浴びている行動経済学とも関連する論点である。

なお、上記の分析のほか、関連するモデルと実験について、この3年間で、多くの国内外学会での報告や論文投稿をおこなってきた。そして、現在、複数の論文について、海外査読ジャーナルへの投稿準備を進めている最中である。

さらには、3年間の我々の研究の進展について、書籍として出版する計画をすでに進めており、具体的には2019年3月頃の出版を目指し、準備を進めているところである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計16件）

[1] K. MIWA, Y. MURAKAMI, A. SHIIBA and S. TAGUCHI, Contract Rigidity and Timeliness of Accounting Information.

RIEB (Research Institute for Economics & Business Administration) Kobe University Discussion Paper Series No. 2018-09, pp.1-30, 2018.

[2] 田口聡志「人間とAIとが共存する未来社会のデザイン：実験社会科学、トランス・サイエンス、フューチャー・デザインの融合へ向けて」『同志社商学』69(6):177-202, 2018年.

[3] 上枝正幸「実験研究とディスクロージャー研究 その2」『青山経営論集』, 第52巻第4号, 47-69頁, 2018年.

[4] 田口聡志「IFRSのグローバルジレンマ：IASBの意思決定と基準導入の質」『企業会計』69(8): 41-48, 2017年.

[5] 三輪一統・椎葉淳「新規参入企業に対するプレアナウンスメントの戦略的効果」『現代ディスクロージャー研究』16巻, 1-23, 2017年.

[6]田口聡志「グローバル問題と実験制度会計論」『会計』第191巻第1号、30-39、2017年.

[7]上枝正幸「裁量的会計ナラティブ：経営者の言説の研究」『青山経営論集』51巻3号、169-192、2016年.

[8]S. Taguchi 「 Toward the policy evaluation for the Japan's Corporate Governance Code: A future outlook」『同志社商学』第68巻1・2号、29-36、2016年.

[9]田口聡志「ルールのタイプとそのパフォーマンス：会計規制のあり方に関する実験研究の現状と展望」『同志社商学』第68巻3号、33-51、2016年.

[10]田口聡志・上枝正幸・三輪一統「契約支援機能における会計の質に関する理論と実験の融合に向けて」『同志社商学』第67巻第4号、253-279頁、2016年.

[11]田口聡志・村上裕太郎「タックス・コンプライアンス実験研究の現状と展望」『同志社商学』第67巻第5・6号、19-44頁、2016年.

[12]太田康広「理論と実証の融合：アーカイバルリサーチのミクロ経済学的基礎」『会計』189巻1号、51-63、2016年.

[13]上枝正幸「会計をコミュニケーションする過去・現在・未来」『青山経営論集』50巻4号、21-40、2016年.

[14]太田康広「利益の硬さと利益マネジメント」『会計』188巻3号、310-324、2015年.

[15]上枝正幸「実験研究とディスクロージャー研究<その1>」『青山経営論集』50巻3

号、55-78、2015年.

[16]田口聡志「会計と実験：未来をデザインする会計」『季刊企業経営』第132号、12-15頁、2015年.

〔学会発表〕(計24件)

[1]K. MIWA, Y. MURAKAMI, A. SHIIBA, and S. TAGUCHI.
Contract Rigidity and Timeliness of Accounting Information.
『日本ディスクロージャー研究学会第3回 JARDIS ワークショップ』2018年3月3日、慶應義塾大学.

[2]三輪一統・田口聡志・山本達司
"The escalation of lies: An experimental study of the repeated deception game."
第21回実験社会科学カンファレンス、2017年10月22日、関西大学.

[3]T. YAMAMOTO, S. TAGUCHI and K. MIWA.
"Are IPOs 'Overpriced'?: Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter by Lying."
28th Asian-Pacific Conference on International Accounting Issues, The Ritz-Carlton, Kapalua in Maui, Hawaii, USA. 2016.11.6-9、国際会議.

[4]T. YAMAMOTO, S. TAGUCHI and K. MIWA.
"Are IPOs 'Overpriced'?: Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter by Lying."
6th International Conference on Business and Economics Research, Holiday Inn Vancouver-Centre, Canada, 2016.9.21-23、国際会議.

[5]田口聡志
「第44回日本公認会計士協会学術賞受賞作品：会計不正と実験制度会計論~未来の会計をデザインする~」
日本公認会計士協会第37回研究大会2016、迎賓館グランプラス(福島県)、2016年9月16日、招待講演

[6]田口聡志
「会計のグローバル問題と実験制度会計論」
日本会計研究学会第75回全国大会統一論題報告(招待講演)静岡大学、2016年9月13-14日、静岡コンベンションアーツセンター

[7]三輪一統・田口聡志・藤山敬史

「減損会計と透明性：経営者と監査人における意見対立の開示効果の実験研究」日本会計研究学会第 75 回全国大会自由論題報告、2016 年 9 月 14 日、静岡コンベンションアーツセンター

[8]Y. Murakami and Shiiba
"Voluntary disclosure and value relevance of segment information" the 2016 AAA(American Accounting Association) Annual meeting, New York Hilton Midtown, New York, USA. 2016.8.6-10, 国際会議

[9]田口聡志
Voluntary disclosure does not promote the trust between investor and manager: An experimental study.
CEE and RISS Seminar Series on Experimental Economics, 2016.7.21, 関西大学経済実験センター・ソシオネットワーク戦略研究機構主催、招待講演

[10]田口聡志
「会計不正とガバナンス：経済実験によるアプローチ」日本監査研究学会西日本部会 2016 年 7 月 2 日、追手門学院大学、統一論題報告、招待講演。

[11]田口聡志
「真実の報告をさせるには：実験契約理論の最新の動向」メルコ管理会計研究セミナー、メルコ財団招待講演、2016 年 6 月 11 日、埼玉大学

[12]Y. Murakami and S. Taguchi
"Tax compliance with strategic auditors: An experimental study."
39th European Accounting Association Annual Congress, Maastricht University 2016.5.13, 国際会議

[13]田口聡志
「実験会計研究の最先端」第 1 回 JARDIS ワークショップ(日本ディスクロージャー研究学会)招待講演、県立広島大学、2016 年 3 月 22 日。

[14]K. MIWA, S. TAGUCHI, T. YAMAMOTO
"Are IPOs ' Overpriced ' ? Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter by Lying,"
Tokyo Accounting Workshop(東京大学金融教育研究センター主催)招待講演、東京大学、2016.3.11.

[15]田口聡志
「実験で会計の何が分かるのか 実験制度会計論序説」早稲田大学 WABERG ワークショップ 経済・ビジネス・会計に関する実証的研

究のフロンティア(招待講演),早稲田大学, 2016 年 2 月 8-9 日

[16]田口聡志
「真実報告に関する実験研究の最前線：会計不正問題を念頭に置いて」大阪大学経済学部経営研究会、招待講演、大阪大学、2016 年 2 月 3 日

[17]K. MIWA, S. TAGUCHI, T. YAMAMOTO
"Strategic Commitment and Lying: An Experimental Study on the Interaction between Entrepreneur and Underwriter" The 6th International Conference of The Japanese Accounting Review, Kobe University, JAPAN, 2015.12.9.

[18]S. Taguchi
"How does the difference in social norms of disclosure systems affect the development of trust," 第 19 回実験社会科学カンファレンス、2015.11.29, 東京大学。

[19]S. Taguchi
"Experiments on Strategic Interactions between entrepreneur and Underwriter," 行動経済学会第 9 回大会(招待セッション)、近畿大学、2015.11.28, 招待講演。

[20]K. Miwa
"Why do people tell lies" 行動経済学会第 9 回大会(招待セッション)、近畿大学、2015.11.28, 招待講演。

[21]Y. Murakami and S. Taguchi
"Tax compliance with strategic auditors: An experimental study", Y. Murakami and S. Taguchi, Asian Pacific Conference on International Accounting Issues, Sanctuary Cove, QLD, AUSTRALIA. 2015.11.1-3, 国際会議

[22]Y. Murakami and S. Taguchi
"Tax compliance with strategic auditors: An experimental study"
Concurrent Session: Tax compliance, the 2015 AAA(American Accounting Association) Annual meeting, Hyatt Regency Hotel Chicago, Chicago, IL, USA. 2015.8.8-12, 国際会議

[23]Y. Murakami and S. Taguchi
"Tax compliance with strategic auditors: An experimental study"
The 74th conference of The Japanese Accounting Association, Kobe University, JAPAN, 2015.9.6-8

[24]太田康広

「理論と実証の融合」第 74 回日本会計研究
学会全国大会、統一論題報告（招待講演）
2015 年 9 月 6-8 日、神戸大学.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 聡志(Satoshi TAGUCHI)
同志社大学・商学部・教授
研究者番号：70338234

(2) 研究分担者

太田 康広
慶應義塾大学・経営管理研究科・教授
研究者番号：70420825

椎葉 淳
大阪大学・経済学研究科・教授
研究者番号：60330164

上枝 正幸(Masayuki UEEDA)
青山学院大学・経営学部・教授
研究者番号：20367684

村上 裕太郎(Yutaro MURAKAMI)
慶應義塾大学・経営管理研究科・准教授
研究者番号：30434591

三輪 一統(Kazunori MIWA)
神戸大学・経済経営研究所・講師
研究者番号：00748296